

——わたしでいいならなんでもするから。

そのときわたしは、数分前の自分の発言を後悔していた。

そんなわけないのに、どこか熱っぽく感じる目でわたしを見つめる彼に体の温度が上がってしまいながら、ブラウスの胸元のボタンをゆっくりと、ひとつずつ外していく。

（こんなつもりじゃなかったのに……）

そう思うわたしの頭の中では、先ほどのことが思い出されていた。

シャッター音と、やたらと明るいカメラマンの声。

その日はわたしがマネージャーを務めているスリーピースロックバンド

「FLIKLE（フリクル）」の、インタビュー写真撮影が行われていた。メンバーの中心で穏やかに微笑むわたしの幼馴染——檜山謙也（ひやま・けんや）

の姿にほっと息をつくとき、後ろでアシスタントの女の子たちの高い声が聞こえてくる。

「やっぱりFLIKLEがっいいいなあ」

「ね！ 眼福〜！ 特に謙也さんイケメンすぎ！」

「推せるよね〜」

うっとりしたその声を聞くと、相変わらず人気だなあ……と舌を巻いてしまう。

FLIKLEのギターボーカルを務める檜山謙也は、切れ長の大きな目に整った鼻筋で、普段はドキッとするような色気を帯びた顔だけれど、笑うとどこか少年のようなあどけなさを覗かせる顔立ちだった。彼以外のメンバーも所謂イケメンと言われる顔をしているFLIKLEだけれど、その中でも謙也くんは特に目を引く容姿をしている。

わたしと謙也くんは幼いころに家が近所だったという月並みな理由で仲良くなったのだけれど、昔から彼が女の子にモテるのは変わらない。バレンタイン

では学校中の女の子からもらったんじゃないかというくらいチョコをもらっていたし、進学すれば名前も知らない先輩に呼び出されて告白されていた。

（幼馴染だっていうだけで、わたしもたまに嫌がらせされてたなあ……）

ぼんやりとそんなことを思い出していると、同時に嫌なことでもいい出しそうになったので、頭を振ってかき消した。

とにかく、そんな謙也くんはいつしか音楽に興味を持ち、高校生のころに結成したバンドでメジャーデビューを果たしたのだ。謙也くんに頼まれて、アマチュアのころから半ばマネージャーのようなことをしていた流れでわたしがそのままELIKLEのマネージャーになり、現在に至る。

「さっきの写真も見た？ ビジュ良すぎ〜！」

「ね！ 普段かっこいいのに、笑うとちょっとかわいいのもいいよね！

ギャップ！」

後ろで話す女の子たちの声に苦笑する。なぜなら、わたしは知っているのだ。それどころではない謙也くんのギャップを……。



「疲れたあ……」

本日の仕事すべて終わり、楽屋のテーブルの上で頭を伏せる謙也くん再び苦笑した。私服に着替えた途端だらけきった姿になる謙也くんをさっきの女の子たちが見たら、ギャップどころではないかもしれない。

（まあ今日は楽器に触る時間もあんまりなかったもんね……）

いかんせん顔がいいので誤解されることも多いのだが、謙也くんは本当は泥臭く音楽がしたい人だった。そのため、曲に関するインタビューとはいえ、なかなか楽器を触ることもできない今日のような仕事のあとはいつもこうなってしまうのだ。

「じゃあ柚琉（ゆずる）ちゃん、謙也のことよろしくね」

先に準備を終えて帰ろうとするメンバーの二人に手を振ると、楽屋の扉が閉まって二人きりになる。こうなるとなかなか動かないので、ほかの二人には悪いけれど謙也くんをなんとかするのわたしの仕事のうちだった。

「謙也くん、疲れたなら帰ろう？ わたし車で送るから」

「むり……行くなら柚琉と同じ家がいい……」

「なに言ってるの……」

本当に疲れているのか、よくわからない言葉を返しながらも動かない謙也くんを横目に、どうしたものかと首を捻る。

（やっぱりもうちょつとスケジュール調整すればよかったかなあ……でも今回はどうしてもしうがなかったし……）

うーんと眉を寄せていると、謙也くんがこちらを見ていた目と不意に目が合った。

「ん？」

少しとろんとした目に見つめられてドキッとするけれど、表情には出さないように努めて首を傾げる。すると、謙也くんがぼつりと小さな声で「癒されたい……」と呟いた。そのとき少しだけ、嫌な予感が頭を駆け巡る。

「俺こういう仕事向いてない……もうむり疲れた……」

力の抜けた表情の謙也くんは、冷たい汗が背中を伝う。普段誰に対しても人当たりがいい反動なのか、謙也くんはわたしに對してはわがまを言うことも多かった。そもそもマネージャーをやることになったのも、謙也くんがどうしてもわたしに頼んできたからだだったのだ。今となってはもう、やりがいを感じている仕事だけだ。

（でも明日もインタビュがあるのに、このままだと困る……）

明日の予定を思い浮かべると、わたしは引きつりそうになる頬を無理やり吊り上げた。

「も、もう、なに言ってるの？ 向いてないわけないよ！ 謙也くん今日も完璧だったよ」

少々引きつった笑顔を浮かべてそう言うけれど、謙也くんからは

「んー……」という曖昧な返事しかない。それに参ってしまいがちながらも、とりあえず言葉を続けていく。

「ね、明日終わればとりあえずおやすみだから、もう少しだけがんばろ。わたしでいいならなんでもするから……」

こうなったら長いかもしれない……と思いつながら言った、半ば願うような言葉だった。けれどそんなわたしの気持ちとは裏腹に、意外にも謙也くんはその言葉にハッとしたように顔を上げる。ぱちぱちと目を瞬かせる謙也くんの目と目が合った。

「なんでも……？」

「え……」

すんなり顔を上げたことが意外すぎて驚いていると、謙也くんはそんなわたしを見て少し気まずそうに目を逸らしたあと、ゆるゆると再びテーブルに顔を伏せた。

「えっ……な、なに？　してほしいことあるの？」

顔を伏せた謙也くんに前のめりになりながらそう尋ねると、謙也くんが小さくなにかを言う声が聞こえた。うまく聞き取れなくて、謙也くんに耳を近づけながら「え？」と聞き返す。それからやや間が空いて、

「おっぱい触らせて……」

謙也くんが、そう言った声が聞こえた。

(え……?)

その瞬間、わたしの頭の中は真っ白になる。なにを言われたのかすぐには理解できなくて固まってしまうわたしの耳に、謙也くんの照れたような声が続けて届いた。

「柚琉がなんでもって言ったんだろ……」

その言葉によく思考が追いついてきて、体全身がぼおっと火がついたように熱くなった。

「い、言った……けど……」

狼狽えて少しだけ後ずさってしまうわたしに、顔を上げた謙也くんの視線が突き刺さる。その目が少し熱を帯びたように見えたから、ますます顔に熱が集中してしまった。

恥ずかしくて顔を逸らしたら、ガタツという椅子から立ち上がるような音が聞こえて、謙也くんの気配が近づいてくる。

「……嘘ってこと?」

「い、いや……」

目の前に立つ謙也くんの顔が近づいてきたのがわかって、正面を向くことができない。後ろにはもうすぐそこに鏡台があつて後ずさりできなくて、謙也くんの手がわたしの後ろの鏡についているから、追い詰められてしまった。そもそも、狭い楽屋では逃げる場所なんてない。

顔に集中した熱はどこかへ行つてはくれなくて、ドクンドクンと心臓の音がやたらと主張してくる。こんなにうるさかったら、すぐ近くの謙也くんにも聞こえてしまいそう。そう思うとさらに激しくなっていくようで、いつのまにか口の中に溜まった唾液をごくんと飲み込んだ。

「ちよつと……だけ、なら……」

恥ずかしくて苦しくて、もう逃げ出してしまいたかったからかもしれない。気がついたらわたしは、そう呟いていた。

わたしの言葉を聞くと、謙也くんの手が伸びてきた。ゆっくりと近づいてくる手が腰元に触れ、少しずつ上がってくる。そしてブラウスの上から胸に触れると、形をなぞるようにそつと撫でた。

「……………」

その手がする……つと胸を撫でて、時折柔らかさを確かめるようにふに……と揉むのを見ると、なんだかすぐくへんな気持ちになってきたから、視界に入れないように目を逸らした。

それからなるべく別のことを考えるようにしてそのまま時間が過ぎるのを待っていると、胸から手が離された代わりに、ブラウスのボタンがぷちつと外される感覚がした。

「えっ……な、なにへんなこととして……っ」

「直接触っていい？」

言いながらも謙也くんの手が次のボタンに伸びるので、慌てて胸元を押さえて止めさせる。

「ちょ、直接はだめ……っ」

顔が熱くなるのを感じながらもなんとかそう言うと、謙也くんが小さく笑う声が聞こえた。

「じゃあ、下着の上からは？」

「し、したぎ……」

恥ずかしさから正常に動いてくれない頭をなんとか動かして考える。下着の上からなら、直接よりはいいのかも……。そう答えを出したわたしは、こくんと小さく頷いた。謙也くんは頷いたわたしの頭を宥めるように優しく撫でると、耳元でそっと口を開く。

「もう変なことしないから……ボタン、外してくれる？」

謙也くんの低くてどこか甘い声で囁かれると、耳の辺りがくすぐったくて、頭の中が真っ白になる。

わたしは視線を彷徨わせながらも、胸元のボタンに手をかけた。緊張なのか羞恥なのか、少しだけ震える指でゆっくりボタンを外していく。

ボタンを外されたブラウスの隙間からキャミソールの下黒いブラが少し見えてしまっていて、謙也くんの指がちらりと覗いたブラを上からつつ……となぞった。

「柚琉、こういうブラ着けてるの？　なんかエロいね」

「え、えろくない……っ」

反射的にそう返しながら、隠すように勢いよくブラウスの前を両手で閉じる。そのわたしの反応にふ、と小さく笑った謙也くんは「ごめんごめん」と言っ、て、ブラウスを握り締めるわたしの手を上から握った。

「かわいいって意味。もうちょっと見せてよ」

優しくそう言いながらわたしの手を取ってブラウスから離させると、キャミソールを捲り上げた。

「しっ、下着の上からって……っ」

「ブラだって下着でしょ？」

謙也くんのその言葉に、なにも言えなくなってしまう。恥ずかしくて顔を逸らすわたしを見て満足したのか、謙也くんの手がブラの上から胸に触れた。ブラ越しなのにやけに熱く感じる体温に、わたしの体も熱くなっていく。

「……っ」

やわやわと胸を揉んでいた謙也くんの手が、突然きゅっ♡ とブラの上から乳首を摘まんで、体がびくりと震えてしまう。そのあとも、ブラの上からの確に乳首を刺激されて、意識を逸らしたいのに逸らせなくなっていく。

「ん……け、謙也くん……も、もう……っ」

だんだんへんな気持ちになっていくのを自覚して、謙也くんを止めようとしたときだった。胸を触っていた謙也くんの片方の手が背中中に回されて、パチ……っと、いとも簡単にブラのホックが外されてしまった。

「な、なんで、ホック……っ！」

「しー。声聞こえちゃうよ」

慌てて謙也くんに抗議しようとする、人差し指を口の前に立てられる。それに焦って口を噤むと、楽屋の外から女性の話し声が聞こえた。外に人がいるのにこんなことをしているという事実を再び実感して、かああっと体が熱くなる。

「大丈夫。ちゃんと下着の上からにするから」

女性たちの声が遠くなったところ、謙也くんがブラの上から胸に触れる。けれど支えを失ったブラはもうほとんど機能していなくて、宙に浮いたブラの隙間から謙也くんの親指が滑り込んできていた。

「あ、だめ、入ってきちゃ……んっ♡」

それを止めようとしたら謙也くんの親指が、すり……♡ と乳首を撫でたから、甘い声が漏れてしまう。へんな声を出してしまったことに恥ずかしくなつて、口を押さえて謙也くんから顔を逸らした。

「柚琉、かわいい……」

謙也くんのうっとりした声が聞こえたかと思ったら、今度はちゅう♡ と首すじにやわらかいものが吸いついた。それと同時に乳首をすりすり♡ と親指で擦られて、どんどん固く勃起が上がっていつてしまう。

「ん……っ、う……♡ けんや、くん……待って……だめ……っ♡」

乳首をすりすり♡ と擦られたり、ぐにゅぐにゅ♡ と押しつぶされたりするたび、体がビクついてしまつて恥ずかしい。ちゅ♡ ちゅ♡ と首筋や胸元に謙也くんの唇が吸いついてくると体がどんどん熱くなって、それに合わせるように息も上がっていく。

「ん……はあ、柚琉の乳首、こうやってすりすりすると、どんどん固くなつくね。声もえっち……気持ちよさそうでかわいい……」

耳元で囁くように言われると、耳に息がかかって背中がぞくぞくする。恥ずかしくて、どうにかしたくて謙也くんの腕を掴むけれど、もう親指どころか手全体が直接肌に触れていて、くにくに♡と乳首を指で摘まれると体の力が抜けてしまう。

「っ……んう……♡ だめ、も……やめ……っ♡」

「柚琉のこんな姿見たら止められないよ。俺のこと煽るみたいにすごいエロい顔してるの、わかる？」

「煽ってなんか……っ、あっ♡」

否定したいのに、謙也くんの指できゅう♡と乳首を摘まれると甘い声が出てしまつて、説得力がなくなる。

「そんなエロい声出して腰もびくびく動かしてるのに、煽ってないって？ 柚琉は素直じゃないね」

謙也くんのその言葉によく自分の腰が動いてしまっていたのに気がついて、火のついたように顔が熱くなった。まるで物欲しそうに足の間を擦り合わせていて、その中心はじんじんと熱を持っている。

「かわい。柚琉の触ってほしいここも、気持ちよくしてあげようね」

「あ、待って……んっ♡」

履いていたスラックスもすぐにフックを外されて、手がショーツの中に入ってくる。割れ目をなぞるように触れると、ぬちゅ……♡ と水音が聞こえて、自分が気持ちよくなってしまうことを思い知らされるようだった。

「すごいぬるぬる……本当は下着が汚れちゃうから脱がせてあげたいけど、さすがにここじゃ柚琉のこと裸にできないから……スラックスだけ下げようね」

「んうっ……♡ 待って……も、いいの……あっ♡ はず、かしい……う……

……♡」

スラックスを膝まで下げられて、謙也くんの指が割れ目をゆっくりと往復する。そのたびにくちゅ……♡ くちゅ……♡ と愛液の音が耳に響いて恥ずかしいのに、体が気持ちよさに抗えなくて声が漏れてしまった。

「柚琉、かわいい……今すごいエロい格好してるよ。見せてあげよっか」

「あっ、ひ……!?!♡」

謙也くんはそう言うのと、くるりとわたしの体の向きを変えた。自分にもたれかからせるようにしてわたしの体を後ろから支えると、わたしの視界の先には先ほど後ろにあった鏡台が現れる。

「ブラウスはだけさせておっぱい曝け出して、スラックスずらされておまんこいじられて……さっきまでしっかり着てたのに、恥ずかしいね」

鏡台の鏡に映っていたのは、謙也くんの言う通り、あられもない自分の姿だった。おへそ辺りまでボタンが開けられたブラウスの隙間からキャミソールとブラが上にずらされて、おっぱいが曝け出されてしまっている。片方の乳首は謙也くんに、くにくに♡と芯を押しつぶすように摘まれていて、その反対の乳首もびん♡と主張するように固く勃起上がっていた。膝あたりまで下ろされたスラックスではもうショーツを隠すことはできていなくて、謙也くんの手がショーツの中に侵入して動いているのを見るのはやたらと扇情的だった。

「ぐう……っ♡ はず、かし……♡」

耐えきれなくて顔を背けると、後ろの謙也くんが割れ目を往復するように動かしていた指をおまんこの入口に宛てがった。指をおまんこにくつつけたり離

したりすると、ちゅぽっ♡　ちゅぽっ♡　と水音が聞こえる。わざと音をたてるようなその指の動きに、恥ずかしさでおかしくなりそうだった。

「恥ずかしいの？　でも柚琉のおまんこからどんどんえっちな汁が溢れてきちゃってる……恥ずかしいの好きなんだ」

「ち、が……あぁっ♡」

否定しようとしたのに謙也くんの指がクリトリスに触れて、つい大きな声が出てしまう。それに恥ずかしくなって口を手で覆うと、まるで待っていたみたいに謙也くんの指がクリトリスをちゅこちゅ♡　と擦り始めた。

「柚琉のこのえっちな勃起クリ、指で擦ってあげるから、このままイってるところ俺に見せて。柚琉もちゃんと鏡見て、誰にイかされてるか覚えておくんだよ」

「っ……んっ……ふ……♡　くくっ♡♡」

クリトリスを指で挟んで上下に擦るようにぬちゅぬちゅ♡　と動かされると、頭に火花が飛ぶような激しい気持ちよさが襲ってきた。乳首もくにゅくにゅ♡　揉みしだかれて、絶頂感がどんどん昇ってくる。

（だめ、こんなところでいきたくないのに♡ 鏡で姿見えちゃうの恥ずかしいのに♡ クリと乳首いっしょにいじられると我慢できない♡♡）

「んっ……ぐ……っ♡ ぐっ……っ♡ ……♡ ……♡♡」

びくびくびくっ♡

声を押し殺す代わりに腰が大きく跳ねて、絶頂に達してしまう。

力が抜けてフラつくわたしの体を後ろの謙也くんが支えてくれると、そのまま抱き締められるような形になった。謙也くんを抱き締められるような体勢のまま、はっ♡ はっ♡ と肩で呼吸していると、謙也くんがわたしの頬にちゅう♡ と唇を押し付ける。

「いってるところもかわいい……♡ ちゃんとイけてえらかったね、柚琉♡ 俺、明日もがんばれそう♡」

そのまま何度もわたしの頬にキスを落とす謙也くんが思考が追いつかなくてされるがままになっていると、いつのまにか謙也くんがわたしの下着や服を直してくれていた。そして理解が追いつかないまま流されるように楽屋から出ていっしょに帰路につくと、気がついたらわたしは自分の家に帰っていた。

（あれ……さっき、なにが起こってたんだけ……？　なんかすごいことが起きてた気がするけど、でも謙也くん明日もがんばれるって言ってたし、なんかがすごい機嫌良かったし……別に大丈夫だったのかな……？）

自分の家に帰ってお風呂を済ませてベッドに入ってる間もずっと、わたしの頭の中には疑問符が浮かんだままだった。



「大丈夫じゃなかった気がする……」

次の日、ELIKEのメンバーを迎えに行く前の空き時間で、仕事で知り合った友達の莉帆（りほ）ちゃんとランチをしていたわたしは、気がついたらそう呟いていた。正面に座る莉帆ちゃんが「なにが？」と首を傾げる。それにはっとしたけれど、わたしは「あ、いや……その……」としどろもどろに意味のない言葉を口にするこゝろしかできなかった。

「よくわかんないけど、柚琉は今日どうするの？」

「えっ……」

「合コン」

莉帆ちゃんの言葉に、しばらくの間思考が停止する。そんなわたしを見かねたのか、「まあ異業種交流会？　って言った方がいいのかな。柚琉も先輩から声かけられてたよね」と続けて言った。

その言葉に、ようやく思い出す。今日の夜、先輩から異業種交流会——平たく言うと、大人数での合コンがあると声をかけられていたのだ。たしか、莉帆ちゃんも同じタイミングで彼女の仕事の先輩から声をかけられていた。

「でも柚琉は参加しないか」。謙也さんがいるもんね」

「り、莉帆ちゃん……！　そういうのじゃないから……っ」

当たり前のように言った莉帆ちゃんの言葉を慌てて静止して、誰かに聞かれてないかと思わず周りをきよろきよろしてしまう。特に聞かれてはいない様子で、ほっと胸を撫で下ろした。

「そうなの？　もったいないなあ。絶対イケると思うのに」

「もういいよ、その話は……」

じろつとした視線を向けると、莉帆ちゃんは「はあい」と引き下がってくれた。それに安心して食後のカフェオレに口をつけると、なんだか考えてしまった。今日このあと、謙也くんとどんな顔をして会えばいいのだろうか。

「……行こうかなあ」

「え？」

「異業種交流会……」

ぼつりと呟くと、莉帆ちゃんが「め、珍しい……」と目を瞬かせる。

とにかくわたしは、今日仕事が終わったあとに謙也くんと二人になるのが怖かったのだ。仕事は仕事と割り切れるし、そもそも謙也くん以外にELIKEのほかのメンバーもいるから、二人きりというわけじゃない。でも今までの経験上、仕事が終わったあとに謙也くんと二人きりになる可能性は高かった。

（……本当はこんなふうにだけは、なりたくなかったのに）

その後、莉帆ちゃんに「やっぱり無理と思ったらキャンセルできるらしいから、無理しないでね」と何度か念押しされてから別れると、憂鬱な気持ちを携えながらメンバーを迎えに車を走らせた。



「お疲れさまでしたー！」

インタビューも撮影も無事に終わりスタッフからそう声がかかると、わたしは謙也くんも含めたELIKTEのメンバーを足早に楽屋へと送った。部屋に入る間際、謙也くんがなにか言いたそうにこちらを見たけれど、その視線には気がつかないふりをして。

「わたし、今日はこのあと予定があるから、三人ともいっしょに車で送るからね」

それだけ伝えて着替えてもらうために楽屋の扉を閉めると、スマホが振動したことに気がついてポケットから取り出す。見れば、そこには今日の異業種交流会——もとい、合コンの案内が送られてきていた。

待っている間なんとなく案内に目を通してしていると、後ろから「ふうん」という声が耳のすぐ近くで聞こえる。ぎょっとして振り返れば、わたしのスマホを

覗き込む謙也くんの顔が見えた。急いだのか、もう私服に着替え終わっている。

「このあとの予定ってなにこれ？ 合コンってこと？」

いつもの笑顔とは違い、不機嫌そうに顔を歪めた謙也くんに、勢いよくスマホの画面を自分の胸に押し当てて隠す。けれどそれは後の祭りのようで、不機嫌そうな表情は変わらなかった。

「仕事終わってないうちから合コンのこと考えてたの？ ちょっとムカつく」

「そ、そういう、わけじゃないけど……ごめん……」

わたしの仕事は彼らを送迎することも含まれているので、そう言われるのも無理はないと思って謝った。ピリついた空気が少し怖い。

「柚琉、こういうの好きじゃないだろ。行かなくていいよ、必要ないから」

冷たい声で淡々とそう言われると、なんだかカッと喉元に熱が込み上げてきて、その気持ちを吐き出すように口を開く。

「し、仕事のことなら言われてもしようがないけど……プライベートのことは……謙也くんには、関係ない……でしょ……」

「は？」

振り絞るように言った言葉に、謙也くんの冷たく聞こえる声が降りかかる。もともと今日は顔を合わせないようにしていたというのもあったけれど、明らかに怒ってる様子を感じ取ったわたしは謙也くんを背に向けたままで、彼がどんな顔をしていたのかはわからない。

なんだか胸を締めつけられる心地がしてぎゅつと目を瞑ると、謙也くんがわたしの右腕を荒々しく握った。

「な、なに……っ」

突然のことに驚いて振り返ると、謙也くんは楽屋にいるメンバーの二人に「ごめん、ちょっと柚琉に話あるから連れてつてもいい？」と声をかけていた。疑問符と不安な気持ちたちが渦巻いているわたしの横でメンバーの二人がそれをあっさり了承すると、そのまま腕を引かれてスタジオを後にする。途中、何度か謙也くんになにか言おうとしたけれど、ピリついた空気を出す彼に結局なにも言うことはできなかった。

車に乗せられて「鍵」とだけ短く言う謙也くんにおそろおそろ車の鍵を渡すと、それ以上なにも話さないまま車を走らせてマンションに連れて来られた。そこはわたしの住んでいる部屋があるマンションでもあるし、謙也くんの部屋があるマンションでもあった。引越し先を探していたわたしに謙也くんが「同じところにしよう」と言って、同じマンションに住むことになったのだ。当然、人気バンドのギターボーカルである謙也くんとマネージャーのわたしでは収入に差がありすぎるので、「謙也くんと同じマンションなんてわたしには無理だよ」と伝えたのに、彼が「俺が柚琉に合わせるから」と言って、いつのまにかそうなっていたのだ。

どこに行くつもりなのかと思いながら大人しく手を引かれていると、謙也くんの家にたどり着いた。何度か来たことのある玄関の扉が閉まると、謙也くんがこちらを振り返る。ようやくちゃんと顔が見えるかと思ったけれど、電気のない室内ではよく表情がわからなかった。

「あの、謙也くん……—」

「柚琉って、どういうつもりなの？」

振り返った謙也くんになにか言おうと口を開いたけれど、それを遮るようにして謙也くんがそう言った。そして流れるようにわたしの後ろにある玄関の扉に手をついたから、まるで囲い込まれるような体勢になる。暗がりではよくは見えないけれど、その瞳が少しだけ潤んでいるように見えて息を呑んだ。

「ど、どういう……って……？」

謙也くんの言葉の意図が読めなくて繰り返すように問いかけると、謙也くんはわたしの唇の端にそっと親指を置いた。

「昨日イカされた男の家に無防備に入ってきて……こんな簡単に触られてさ……」

言われたその言葉に、咄嗟に顔が熱くなった。唇に触れる謙也くんの指が、つつ……♡ と形を確かめるように、わたしの唇の上をなぞっていく。

「ああ……でも柚琉は誰にでも『なんでもする』とか言えちゃう女の子だもんね……？ 昨日もあんな場所なのにすぐ気持ちよくなっちゃってたし……俺が知らないだけで、ほんととは淫乱だったんだ」

「ちが……っ、んっ」

否定しかけた言葉を断ち切るように、謙也くんの唇がわたしの唇を塞いだ。

急なキスに驚いていると、空いた唇の隙間を見逃さずに謙也くんの舌が侵入してくる。抵抗する間もなく舌が絡んできて、やわらかい舌で甘く吸われると体の力が抜けてしまった。

「ん……ふ……っ♡」

そんな声を出したくはないのに唇の隙間から漏れた息が甘いものになってしまつて、自分のそんな声を聞くとさらに体が熱くなつていく。いつのまにか腰に添えられた謙也くんの手が、つう……♡ と腰を撫でていて、体がびくりと震えた。

ぬちゅ……♡ とどちらの唾液の音かわからない音が耳に届いたころには、もう完全に体の力が抜けてしまつていて、甘く絡められる舌をただ受け入れることしかできなくなつていた。

「……んう♡」

キスしながらずっと腰を撫でていた手がブラウスのボタンを外したと思つたら、ブラの隙間から指を差し込んで乳首をカリ……♡ と引っかいた。甘くび

りびりしたような刺激が襲ってきて、思わず近くにあった謙也くんの服の裾を握り締める。

「ん……柚琉、どんどん乳首勃ってきてる……やっぱりこんな状況で触られてもびくびく感じちゃうんだね」

「ち、が……んう♡ ひっ、かりかり……しないでえ……♡」

乳首を爪で引っかくようにかりかり♡ されると、拒絶したいのに気持ちよさに体の力が抜けてしまう。謙也くんの爪で甘く引っかかるたびに、びくびく♡ と腰が震えてしまっていると、その間に背中に戻された手でブラのホックも外されていた。

「待っ……あ♡ だ、だめ……んっ……♡」

固く勃起上がった乳首を片方の手でかりかり♡ と引っかかれて、片方の手でくにくに♡ と押しつぶされると、下半身がどんどん熱くなっていく。玄関でこんなことをしているなんて恥ずかしいのに、まるで興奮しているみたいに息も上がっていつてしまっていて、それにも余計に体温が上がっていった。

じゅわ……♡ と足の間から熱が溢れ出していく。

「エロい声出して腰へこへこさせて……柚琉って誰にでもそうなの？ 俺が一番柚琉のこと気持ちよくしてあげられるって、ちゃんと体に覚えさせないといけないね」

「っひ……や、待って……♡」

謙也くんはそう言うのと、スラックスのフックを外してショーツといっしょにずり下げた。愛液の溢れ出したおまんこが空気に晒されて少し冷たい。

「エロ……糸引いたの、わかる？ こんなところで付き合ってもない男に体弄られて感じてるなんて、柚琉はえっちだね」

「う……ちがっ♡ あっ♡ 言わ、ないでえ……♡」

恥ずかしくて見ないふりをしたいのに、謙也くんは耳元で囁かれて、音をたてるようにおまんこをゆっくりと指でなぞるから、そのたびにぬちゅ……♡
ぬちゅ……♡ と愛液の音が耳に届いてしまう。

割れ目に埋めるように指を動かされるたび、腰をびくびく♡ 跳ねさせていると、謙也くんの指がそれより少し上——クリトリスに宛てがわれる。

「あっ♡」

「ここ、柚琉の気持ちいところ……俺がいっぱい舐めてあげるから、ちゃんと体で覚えるんだよ」

「んっ♡ 待っ、だめ、そんなところ……ああっ♡」

謙也くんがしゃがむのを止めようとしたけれど、クリトリスに熱い舌が這わされると、強烈な快感に背を反らせてしまう。

「ん……柚琉のクリ、嬉しそうにひくひくしててかわい……はあ……すげえとろとろ……」

「あ、あっ♡ や、だめ……んう♡ しゃべっちゃ……ひ……うっ♡

~~~~♡」

口を開くたびに謙也くんの熱い息がおまんこにかかって、それさえも刺激になっってしまう。れろれろ♡ と丁寧にクリトリスに舌を這わせたとしたら、唇で挟んでふにふに♡ と甘い刺激を与えられて、目の前がばちばちと弾けた。きゅう♡ とお腹の下のあたりが締めつけられるのを感じると、とろお……♡ と愛液が垂れてくる。

「んむ……どんだん、溢れてくるね……柚琉、舐められるの……すき？ はあ……俺がいっぱい、舐めてあげるよ……ここ、裏筋も……ん、丁寧に、舐めようね……」

「つづ♡ は、あ……♡ そこ、だめっ……♡ ぐう……♡ ……♡」

クリトリスの裏筋に根元から舌を這わされて先端までゆっくりと舐められると、気持ちよさにおかしくなりそうになる。どんどん絶頂感が昇ってきて、ビクッ♡ ビクッ♡ と腰が震えた。

（だめ♡ またこんなところで謙也くんにかされちゃう……♡ イきたくないのに、クリ舐められると気持ちよくなっちゃう……♡ あ、あ♡ だめ、クリ口に含まれたら我慢できない……♡）

クリトリス全体を口に含まれてちろちろ♡ と下から上に舐められると、激しい快感が襲ってくる。気を抜くと大きな声が出てしまいそうで、口元に上げた手をぎゅっと握り締めた。

「ぐっ、ん♡ ああ♡ も、だめ、イっちゃ……あ♡ イっちゃ……から……っ……♡ ……♡」

「んっ……いいよ……♡ 柚琉、俺だけで気持ちよくなって……♡」

ぬちゅぬちゅ♡ ちゅこちゅこちゅこ♡

ぢゅるるるるっ♡

「あっ♡ だめだめっ、今吸われたらっ♡ んっ……い……っ……♡

っ……！♡♡」

急にクリトリスを吸われたことで、だんだん昇っていった絶頂感を強制的に昇り詰めさせられて、あっけなくイってしまった。がくがく♡ と足が震えてしまっている、謙也くんが立ち上がって支えてくれる。

（どうしよう……またこんな場所で、謙也くんと、こんな……。こんなふうになりたくなかったのに……）

快感の余韻はまだ続いていたのに、恥ずかしさや惨めな気持ちが遅れて渦巻いてきて、顔からサアッと血の気が引いていく。思わずぎゅうっと謙也くんに掴まる手を握り締めてしまっていると、謙也くんの「柚琉……？」という心配そうな声が聞こえた。

「っう……」

そして耐え切れなかった涙がぽろっとわたしの目から零れ落ちたのと、謙也くんがわたしの顔を覗き込んで息を呑んだのはほとんど同時だった。

「ゆ、柚琉？　ごめん、痛かった？　ごめんね」

「ち、ちが……っ、ごめっ……」

返事をしたら嗚咽が漏れてしまいそうで、うまく返事ができない。焦ったような、申し訳なさそうな顔をする謙也くんにも、否定したいのに涙が止まってくれなくて、申し訳ない気持ちが入み上げる。謙也くんのせいで泣いてるんじゃないのに、被害者ぶってるみたいで恥ずかしい。

「ごめ、わたし、帰る……っ」

これ以上ここにいっても涙が止まってくれない気がしたのと、これ以上惨めな思いをしたくなくて、言いながら急いで服を直した。謙也くんが焦ったようにこちらに手を伸ばしたけれど、その手がわたしに触れる前に服を整えて玄関の扉に手をかける。

「柚琉、送るよ……っ」

「いい」

はやく一人になりたくて、謙也くんの言葉を拒否してほとんど逃げるように部屋を出て行く。

早足で階段を降りて自分の部屋に向かう途中、昔のことが脳裏に蘇っていた。

高校生のころ、わたしが謙也くんと幼馴染だと知った先輩から嫌がらせを受けていたことがある。それまでもそういうことがまったくなかったわけではなかったのですが、そのときもまたか……と思いつつもあまり気にしないようにしていた。けれどそれは日に日に頻度を増していった。謙也くんにはずっと隠していたけれど、あるときついに隠し通せなくなったのだ。

苦しくて泣いてしまったわたしの話を聞いてくれて、ぎゅうつと抱き締めてくれたとき、ずっと見ないふりをして自分の気持ちを自覚せずにはいられなかった。

謙也くんが好きだった。

自覚したその次の日、少し高揚した気持ちで学校に向かったけれど、すぐにその気持ちは打ち碎かれることになった。謙也くんが、わたしに嫌がらせをしていた先輩と付き合い出したのだ。

正直自惚れていたんだと思う。ほかの人に対してとわたしに対してでは謙也くんの態度が違った気がしていたし、優しかったし、いつも優先してくれていた。でもそんなのは、全部わたしの思い違いだったのだ。

その後わたしへの嫌がらせはピタリと止んで、謙也くんは少ししてから先輩と別れた。けれど、そのあとに誰かに告白されたら付き合い合っ少したら別れて……を繰り返すようになった。

わたしに対しての態度は昔となにも変わらないし、わたしの望んだ好意ではなくても、きつと幼馴染として特別に思ってくれてるんだと思っていた。だからマネージャーをやると決めまし、『特別な幼馴染』として、この関係を大切にしようと思った。

だけどそんなのもきつと、全部わたしだけが感じていた気持ちだったのだ。  
謙也くんにとってのわたしは、ほかの女の子となにも変わらない存在だったの  
だろう。

その日はそれ以上なにもする気が起きなくて、合コンのキャンセル連絡だけ  
をしてお風呂を済ませ、ベッドに潜り込んだ。